

<牧会ミニ通信>No.31 2020.12.6.

沖縄には、親戚縁者は一人もいません。ゼロからの開拓の難しさは初めから覚悟していました。しかも、立地条件が最悪です。家墓、亀甲墓が並ぶドン詰まりにある伝道所です。ある牧師は「何でこんなところに・・・」と言われましたが、確かにそうです。

おそらく伝道しても、集まるのは5・6人位かなとも思われました。教会案内をいたしません、トラクトも配布しませんでした。それでも、「来る人は来るであろう」と信じて、読谷の飛行場跡で夜になると祈り、わが妻は朝になるとサトウキビ畑で祈り続けていました。

ある時、銀行に展示されていた南米アンデス風景を描いた絵を、妻が買い取りました。すると、画家のS兄がわが家を尋ねて来ました。彼は、聖公会の会員でした。彼はその後、わが子と一緒に礼拝に出席しはじめました。出会いとは不思議なものです。伝道者として、出会いを大切にすることを学んだ時でありました。

もう一人、忘れがたい女性がいます。わが家の近くに住む沖縄のK姉妹です。いつも、庭のベランダで聖書を読んでいるのを拝見し、はじめは会釈程度でしたが、いつしか親しくなりました。内地からリングが届くと、たった一つなのですがリングを持参して、玄関先に挨拶しに伺いました。すると、彼女のお子さんたちも教会に顔を見せるようになり、教会は次第にぎやかになりました。

ところが五年目の春に、沖縄の気候が身体に合わなくなり、妻と相談して、本土に帰ることを決めたのです。残り一年か・・・と思い、何か残さねばと示されたのが、「使徒信条」26回シリーズです。礼拝後説教原稿を配布しました。しかし、何とも、固い講義調です。内容も易しいとは思えません。それでも配布し続けました。すると、次第に礼拝者が増え始めました。南国沖縄です、物事を考えるには不向きな風土です。ところがなんと「こうした内容の話が聴きたかった」という方が現れたではありませんか。その年の降誕節の礼拝は、所狭しと礼拝者でいっぱいになりました。

周東のぞみキリスト教会：牧師 結城晋次